

第六章 大阪暮らし

会計事務所勤務と経理学院講師

大学院二年目の夏、会計士試験が終わると修士論文以外に大きな拘束がなくなる。十月から、関学の元商学部講師で公認会計士・税理士である伊藤晋三郎先生の会計事務所にアルバイトとして勤務させてもらった。

事務所は、大阪市北区万歳町の清風ビルにあった。下宿のある上ヶ原から、バスで甲東園に行き、阪急電車に乗り換え、西宮北口を経て、阪急梅田へ、梅田からは市バスで通勤した。随分身体の負担になったが、勤務時間に余裕があったので頑張ることができた。

伊藤先生の事務所には、関学の商学部大学院で一年先輩の出原洋一さんと、慶応義塾大学経済学部卒の三田さんという女性がいた。伊藤先生は、主に上場会社の監査業務をされていたので、関与先の税務業務は、この二人が担当されていた。そこに、実務は何も知らない新米事務員の私に加わった。

仕事はほとんどが中小企業の決算と法人税申告書の作成であった。関与先は立派な会社が多かったので記帳受託はほとんど行っていない。出原さん、三田さんと私の三人は、全員会計士試験に挑戦していた。伊藤先生は、午後は毎日出張されるので、執務時間中でも三人で模擬試験や過去問の答案練習をしていた。

法人の決算書や法人税申告書の作成は、主に出原さんに指導を受けたが、決算書や申告書の提出前の最終チェックは、伊藤先生のパートナーであったベテランの本城会計士がされており、懇切丁寧なご指導を受けた。

最終チェックと言っても、パソコンのない時代の決算書や申告書のチェックは、すべての決算書類の表示から、数字の検算、内訳書の明細までを含んでいた。論理や計算の間違いを指摘され、内容の詳細な説明を求められた。

アルバイト期間を含め三年間、伊藤先生の事務所で教えていただいた実務が税理士開業後どれほど役にたったか分からない。先輩の出原さんは、後に税理士事務所を開業された。

申告書作成のテキストは『法人税の決算調整と申告の手引』（大阪国税局版）で、約二千ページある。この本をテキストにして、天満橋の関西産業経理協会で、夜間に研修が行われており、かなり長期間、国税局の中村審理係長の講義を受けた。あまりにテキストが分厚いので、テーマごとに本を切りはがして持ち歩いていた。この手引きは、毎年改定版が発行され、生涯、法

人税申告書作成のテキストになった。

この年の年末だったと思うが、受験仲間で、一年先輩の武田さんの紹介で、難波高等経理学院講師のピンチヒッターをしてくれないかと依頼を受けた。日本商工会議所検定一級コースの工業簿記、原価計算、後に、税理士コースの簿記論の講師を引き受けた。

ピンチヒッターのつもりが二年余り続いた。地下鉄難波駅裏の難波球場前に学校があり、夜間コースを週二日、毎回二時間の講義をした。

人に教えることは本当に楽しい。「教師三年すればやめられぬ」といわれるが、それは本当である。身体が許せばもっと長く続けたかった。

カネに困って始めたことではないが、この頃は、何でもかんでも挑戦していた。後に、税理士コースの生徒であった山下さんという女性から、税理士になったと報告を受けた。簿記論合格だけで税理士になれる訳ではないので、何年もかかって税理士になられたことだろう。世の中に努力家は大勢いる。

いよいよ大学院を修了することになって、ゼミの青木先生から、某学院大学系列の経理専門学校を勧められた。通勤、階段の乗降、板書などを考えてみると、たとえ将来、系列の某学院大学講師への道があるとしても、専門学校講師を生涯の仕事にするにはリスクが多すぎる。そのうえ、受験仲間工業簿記、原価計算を専攻されていた武田隆一先輩が、一年前に、

某学院大学講師と系列の経理専門学校講師をされていたので専門科目が同じになる。青木先生のお勧めに感謝してお断りした。武田さんは、生涯この大学に勤めた。

大学院修了後、十一人の同級生はそれぞれに就職し、博士課程に進んだ者はいない。高木君は、会計士受験の中央大学経理研究所に行き、後に会計士になった。私は、会計士試験の受験や、研究職への意欲に限界を感じていたが、大学院修了後も、引き続き、伊藤先生の事務所のお世話になり、税務の実務を勉強させていただきながら、さらに会計士受験に挑戦することにした。

困ったのは下宿である。上ヶ原の学生下宿は出て行かなければならなし、どこに住んでも、毎日、大阪市内まで通勤するのは困難である。思案していると、大学院の同級で、高等部から関学に来ていた岡田昭二君が、阪急曽根駅前の「かつら荘」に移らないかと勧めてくれた。豊中市曾根に、彼の自宅があり、彼の父が経営する会社も豊中市にあった。彼は後にその会社の社長になった。

彼の親切は、私の身体と通勤を十分検討したうえの提案であった。まず駅から歩いて五、六分くらいで近い。駅も高架駅ではない。木造二階建てアパートとはいえ、管理人がいるし、部屋も二部屋で広い。それに、毎朝七時に一本だけ、阪急曽根駅発梅田行き直通電車がある。それに乗れば阪急梅田まで座って行くことができる。これは本当に嬉しかった。

アパートの一階中央の部屋は、風呂と炊事場がついており、快適であった。あるとき、岡田君が、自宅の生け簀をさらえ、生きた鮎をたくさん持ってきてくれた。清水に放して泥抜きをしてきたから食べたかどうかという。面白そうなので、鮎の頭をハネ、網で焼き、それをてんぶらの酢漬けにして、勤め先に持っていった。出原さんらは、君は何を食べているのかと好奇の目で見ていた。

彼の親切はこれだけにとどまらない。電車通勤で、もはや不要になり、置くところがなかった単車を何万円かで売ってくれた。アパートが彼の自宅近くにあったので、何かとお世話になった。いつも親切な友人に恵まれていたことを幸せに思う。

その後、このアパートの二階に、博士課程を終え、関学の産業研究所の講師になっておられた先輩の来住さん呼び寄せた。三番目の妹が、時々泊まりに来て、食事を作ってくれた。二階の部屋に住む来住さんがご飯を炊き、一階の私の部屋に炊飯器ごと持ってきて、妹が作ってくれた副食で夕食をご一緒した。

毎日食事を一緒にした訳ではないので、自炊や洗濯にも苦労した。男が炊事場や洗い場に立つのは格好のよいものではない。日曜日に副食材料を買い置き、炊飯器でご飯を炊き、副食を作り、ひとり食事をし、その後、ズボンにアイロン掛けをした。ズボンの脛に杖を当てて歩くので、すぐに右足のズボンの筋がなくなり、丸くなる。だらしなく不細工で、恥ずかしいので、

ズボンのアイロン掛けはマメにした。下着の洗濯もした。男がひとり住む苦労はひと通り経験した。来住さんのお付き合いは生涯続いた。

四十三年の公認会計士試験受験は、これで合格かと思ったが、残念ながら念願は叶わなかった。この年の合格発表の日は、朝から大雨で、雨の中、一日中祈り続けた。「どうか、神さま、合格させてください」と。受験仲間がこの年に合格したのは、一年先輩の林さん一人であった。林さんは、後に公認会計士協会・近畿会・会長を務められた。

会計士受験の意欲も冷め、一応の踏ん切りがついたが、これ以上勤務を続けることは、身体的に困難で、伊藤先生の事務所をやめるのはやむを得なかった。

四十三年五月、伊藤先生が、公認会計士等松農夫蔵・青木大吉・青木倫太郎先生ら七人が設立された監査法人等松青木事務所（現トーマツ監査法人）の社員となられたのを機会に、先生の税務事務所も、大阪市中央区備後町の大阪化学繊維に会館に移り、通勤がなお一層困難になっていた。

特に、朝夕の混雑時の地下鉄には怖くて乗れないので、梅田から市バスで備後町まで行き、そこから御堂筋を渡り、西の四ツ橋筋近くまで歩いた。

通勤が身体の限界を超えていた。特に雨の日は困った。もともと傘をさして歩くことも、荷物を持って歩くこともできない。タイルや、コンクリートの床は滑りそうで怖い。ラッシュア

ワ一の階段の乗降と、電車、バスの中で掛り棒付近に立つ苦痛には耐えられず、いつか大失敗をしそうであった。伊藤先生や先輩職員に十分事情をお話してやめさせていただいた。短期間勤務で本当に申し訳ないことになった。

四十四年一月、税理士会・大阪府北支部に税理士登録を行い、夏には難波高等経理学院の講師をやめ、年末になって私の大阪暮らしは終わった。

銀行の調査部に勤めたいと思ったり、高校教員になろうと考えたり、会計士になろうと挑戦したり、いろいろなことを実行してきたが、最後は税理士になった。あらかじめ早くから準備しておいた職業に落ち着く形になった。自分の身体のこと、家庭のこと……等々いろいろな面から考えても、一番素晴らしい道であった。案外、神さまが選択して、私に与えてくださったのかもしれない。